
超初心者魔法使い修行中

天然水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

超初心者魔法使い修行中

【Nコード】

N3292B

【作者名】

天然水

【あらすじ】

あたしリルは空のずっと向こうにある魔法界にすんでいるの！今日は十三歳になる魔法使い達が掟にしたがって集団となって色々なところを旅して修行するっていうことなんだけど…途中、大きな風にあつて、人間界に落ちちゃった…！そこで出会った、ごく普通の女子高生、早川藍と同居することに！（リルから一方的にだけど。）
愉快なリルが繰り広げる人間×魔女コメディー！

第一話天から落ちてきた超初心者（！？）魔法使い（前書き）

第二作目のテーマは「魔法使い」です。でも、この魔法使いは普通の魔法使いとは違って「超初心者」なのです。そのため、藍がトラブルに巻き込まれるのもしばしば…（汗）

でも、天の魔法界から落ちてきた魔法使い、リルがそんな藍と恋愛や友情を体験する話です。

第一話 天から落ちてきた超初心者（！？）魔法使い

プログラマー

天の空高く、そこに魔法界はあつた……

魔法界では今日、掟に従って何千何百人の魔法使い達が集団となつて様々なところを旅し、修行をすることになっていた…

そして今、魔法使い達は集会をしていた……

つかつかと歩いてくるのは魔法使いの中でもエリートの魔法長だった。

「それではこれから長老のお話がある。」

長老は魔法長とは違い、ヨボヨボと台に上ると咳払いをして、演説を始めた。

「えゝ皆のもの。これから皆が行く先には厳しい嵐や吹雪が待ち構えているであらう……」

そんな長老の演説の最中に、ある魔法使いが忍び足で来ていることは、長い間、魔法使いをやっている長老以外、気付きもしなかった……その証拠に長老は演説の最中に眉毛をピクツ！と動かした。

「長老？　どうかありませんか？」

長老は氣を取り直して再び演説を始める。

「えゝ…しかし、皆はそんな嵐や吹雪に強く立ち向かい、そして再び一人前の魔法使いとなってこの地を踏み…」

するといきなり長老はブルース・リー気取りのおたけびをあげて杖を魔法使いに投げかけた。「ホオ~~~~アチヨオオア~~~~」

⌋
!
!
!
⌋

見事、杖は魔法使いに命中した。

長老は体勢を立て直して、魔法使いに言う。

「今日で遅刻は何回目じゃ？リル・アナザー。」

リルは頭をさすりながら、悪態をついた。

「何すんのよ。クソジジイ。」

長老はリルに指をビシッと指して言い放った。

「五十六回目の遅刻の罰じゃ。」

するとリルは長老気取りで

「違うわい。六十六回目じゃあい。ばか者。」

といった。

「やつかましい。何回でも同じじゃ。」

二人はまるで子供のように頬をつねったり、つばをとばしたりした。周りの魔法使い達は心の中で

（この人、長老やめてカンフーやればいいのに…てゆうかマジでこの人長老？）

と思っていた…

一番大人の魔法長は冷静な態度で長老の肩をポンとたたいて言った。

「長老。コイツと喧嘩をしていると出発ができなくなります。さつさと出発をしましょう。」

「おお、そうひやった。では皆の者、ひゅっはふひゃ。（おお、そうじゃった。皆のもの、出発じゃ。）」

そういうと長老は皆に言った。

「いいか？皆のもの。しっかりほうきを握って、教わったとおりにするのじゃ。さもなくば…」

長老がいったところで、後ろからドンツと長老の背中を突く何かがあった。

「うを！？」

実はリルがほうきで無理に飛ばうとしたせいか、ほうきが暴走してしまったのである。

背中を突かれた長老はうなり声と共にうずくまった。

それを見て、魔法長が
「こうなるから気をつける。」
とつけくわえた。

なんとかほうきに乗ることができたリルは爽快に空を飛んでいた。
「ひゃっほぉ」

「これ…り、リル…調子にのるでな…い…」
リルにほうきで背中を突かれた長老はまだ苦しくて声が出せない…

そんなとき…

魔法長が向こうにある大きな雲を見て、そつとつぶやいた…
「…そろそろ…か…」

魔法長はすぐさま皆に指示をだした。

「皆。これから強雲という雲の中に入る。ここを通り抜けなければ
次の場所へは移れない。しっかりほうきにつかまっている！」
ところがその指示を爽快に飛んでいたリルは気がついてなかった。
その姿を見て、友達の一人がリルに言った。

「リル？さっきの話聞いていた？」

「…え？」
するとすぐさま強い風が吹いて、リルは吹き飛ばされそうになった。
「…っ！？」

あまりに突然なのでリルは悲鳴さえも声にでなかった。
もはやリルの顔は風で頬がでろんとなっていた。

と…リルはとうとうほうきから手を滑らしてしまった。
「…れ？」

リルは悲鳴を上げながら下へ落ちていった…
しかし、その声さえも、風に消されて他の魔法使い達には聞こえもしなかった…

第一話 天から落ちてきた超初心者（！？）魔法使い

桜鳳高校…

1・Dでは授業が行われていた…

「早川藍。」

先生は藍を指摘した。

「藍、藍。先生に指されたよ。」

友達の麻里子が藍の肩をたたく。

「え？」

「早川！教科書レッスン2！」

「えと…」

藍は何ページを読むのかわからなくなり、読むのをためらった。

「…もういい。次。後ろ！」

藍はガタンと席に座った。

「はぁ…」

舞い散る桜の花びらを見つめながらため息をついた…

帰りに電車に揺られながら藍は友達と話をしていた。
すると…

「ねえねえ。見て。向こうの車両の隅。長岡くんよ。」
と麻里子が言った。

その瞬間、藍の顔はポツと赤くなった。

「どうしたの？藍…さっきからボーっとしているけど…」

「うつん…別に…」

急いで藍は話をそらすと、ほっと一安心した。

電車を降りるときに…

藍は改札口で定期をだそうとした…

だが、なぜか定期が見つからずに、藍は様々なところを探った。

「あれ…嘘！？もしかして定期落としちゃった！？」

麻里子が

「え〜！マジで！？ヤバイじゃん！」

と言った。

すると…

「早川。これ。」

と何か手渡された。

「あ、定期…て、長岡くん…？」

藍は長岡の顔を見た瞬間、顔を赤くした。

「…？どうかしたのか？」

「い、いや…別に…て、定期ありがとう！」

そついうと藍は急いでかけていった。

その後を麻里子が走って追いかけた。

「ちょ、ちよつと待ってよ、藍…」

家に帰ると…

「ただいま。」

「おかえり、藍。」

と藍のお母さんが迎えてくれた。

藍は二階へ上がって、部屋のドアを開けた…

そのときから藍はまるで巻き寿司のようにごろごろと転がった。

「でへへへ…」

すると藍はハツと長岡が定期を拾ってくれたときのことを思い出し

た…

「…そういえば、長岡君が定期くれたとき…あたし…ちゃんとお礼も言わないで…」

と、藍は膝をかかえた。

「はあ…お月様はなんでも私のことをお見通しなのに…」
と妄想にあけくれているとき…

「藍…！お●しい牛乳買ってきて…」

と下から声が聞こえた。

藍はその言葉で現実の世界にひきもどされて

「もう！せつかくの夢のドリームワールドがお母さんのせいで壊されちゃったじゃないの！」

と怒った。

お母さんは何がなんだかわからなくて、

「？」

と首をかしげた。

しぶしぶ牛乳を買いに行つた藍…

すると…

「あれ…？これは…？」

とつぶやいた…

魔法界から落ちてきたリルは目をふつと開けた…

目を開けた瞬間、リルは

（ああ…ここは？）

と思つた…

リルの予想では誰か貴公子が自分をベッドまで運んでくれて「大丈夫かい？」と顔を近づける模様だったはずだが…

が、予想とは打って変わってそこは下水道だった。

「うんにゃ〜〜！？」

「汚ねえ汚ねえ汚ねえ！」

リルは体についた水をはらった。
そして我に帰って上を見ると…

「…ここは…？」

「わぁ〜〜！十円だ、ラッキー。」
と藍は十円を拾った。

コンビニで藍は牛乳を買うと、家路を歩いていった…
すると藍は路地裏を見つめた…

「こつちのほうが近道だからこつちにしょ…」

誰もいない路地裏…

「ジジッ…」

防犯よけの電気が今にも切れそうだ…
壁には…

『危険！強盗に気をつける！』

というポスターがはられている…

突然、目の前に知らない男が笑いながら現れた！

…とおもいきや、選挙のポスターであった。

『皆さんの明るい未来、そして新しい政権をつくります！奈良橋幸一をお願いします！』

「びっくりした…」

するとガシッと藍の足首を何かがつかむ！

「ひっ…！」

マンホールからあがってくる不吉な陰がうなる…

「メシ〜〜〜〜…」

「キヤアア！↑（ホラー物ではありません。）」
よく見るとそれは一人の女の子だった…

「…ハア…ハア…」

突かれきった表情のリルの姿を見て、藍は…

（何でこの人、マンホールにもぐってるんだろ？）

と疑問を抱いた…

（まあ、普通の人ならこういう人、見てみぬふりするわよね…
そういつてその場を立ち去ろうとしたとき…

「たたりじゃ〜！」

とリルが突然叫んだ。

「ひゃあ！」

藍がびつくりして飛び上がると…

「今、アンタ人のこと置いて立ち去ろうとしたね！？今！」
とリルが言った。

図星のことなので藍は「うっ！」とうなった…

そしてリルは

「人でなし〜！人殺し〜！痴漢、ヘンタイ、強盗〜！おまわりさん
〜！」

とわめいた。

近所の人々が

「なんだなんだ？」

と見に来る。

あわてて藍はリルの手をひっぱって、家路を急いだ。

走ってきた藍は「ハア…ハア…」といいながらリルに

「一体、あんたなんなのよ？」

と顔をあげた。

ところが、そこにリルの姿はなかった…

「…なんだ！勝手にいなくなった！ははは〜！よかった〜！」

藍が愉快に「ただいま。」といってドアをあけるとそこにはリルがいた。

「おかえり」

「お前誰だよ！」

笑顔の藍の顔が苦悶の表情にかわった。

「いやね、この子、昔藍と生き別れになった妹っていうから…」

「いや、あたしの妹にコスプレ好きの妹いないから！てゆーか本気で信じる気？」

と藍が怒鳴ると…

リルの体からはプーンと変なにおいがただよってくる…

「くっさ…！」

シャワーを浴びた後…

リルは大盛りのご飯をかきこむと味噌汁をすすった…

「あゝ！」

藍はじつとリルを見つめると、言った。

「そういえば、どうしてあんたあんなところにいたの？」

「それはダシがきいているから。」

味噌汁をすすりながら言うリルに藍は

「いや、多分それ違う。てゆーかそれって懐かしいCM名発言！？」と突っ込んだ。

箸をおくとリルは

「奥さん、いいお嫁さんになりますぜ。」

と藍のお母さんに言った。

「まあ…」

「いや、てゆーかもう人妻ですし！」

リルは藍を見つめ、

「ハッ！お前は誰だ！」

と言った。

「お前こそ誰だよ！」

「シンデレラ。昔、かわいい女の子がいて、お母さんとお父さんとで幸せに暮らしていたんだけど、お母さんが病気で死んじゃったの。お父さんは新しいお母さんとお姉さんをもらったんだけど、そのお母さんとお姉さんはとても意地悪だったの。しばらくしてお父さんはお母さんの後を追うように病気で死んじゃったの。それからシンデレラはお母さん達にいじめられる日々をつづけてた…ある日、王子様から舞踏会に誘われて、皆着飾って言ったんだけど、シンデレラだけ家に留守番させられて…でも優しい魔法使いが彼女に綺麗なドレスを着せてあげたの。でも魔法は十二時まででシンデレラは急いでお城を飛び出した…そのときに片方の靴を落としたことに気付かなかった…でもその靴がシンデレラと王子様を結びつけたの。」その話を聞いてリルは

「じゃあ、あたし、藍の魔法使いになって藍をシンデレラにしたげる！その代わりにここに居候させて！」といった。

「ええ!？」

二話に続く

第一話天から落ちてきた超初心者（！？）魔法使い（後書き）

いかがでしたか？

第二作目のこの作品は実は私が初めて書いた小説だったんです。

もう何年もたってたんですけど、ふと「もう一度書いてみようかな？」と思ったのですが…

色々と工夫をしてこのHPに載せてみました。

私にとってのデビュー作、これからもどうぞ応援してくださいね

（^^）

第二話初心者魔法使いの学校入学（！？）（前編）（前書き）

「超初心者魔法使い」第二話ではなななな、なんと初心者魔法使いの ril が藍の高校に入学することに！？

一体どうなることやら…それは見てからのおたのしみです…

第二話初心者魔法使いの学校入学（！？）（前編）

〽前回までのあらすじ

あたしリル・アナザーは十三歳の見習い魔法使いで魔法界っていうところにすんでいるの。実は今日、掟にしたがって、旅をすることになっていたんだけど、途中嵐に巻き込まれてほうきから転落して人間界へ…そこで出会ったのはごく普通の女子高生の早川藍って女の子。藍はいつも片思いの長岡君に伝えられない日々…そしてあたしは藍の家に（無理を言って）連れて行ってもらったの。そこで藍に魔法使いつて事を証明。それからあたしは藍の部屋へ行ってみると部屋に「シンデレラ」っていう本を見つけたの。あたしはそれを見て藍に「藍をシンデレラにしてあげるからその代わりに藍の家に居候させて」って言ったの。でも藍はあんまり乗り気じゃないみたい…？

第二話初心者魔法使いの入学（！？）

（あたし、早川藍！ごく普通の女子高生やっています！毎日が楽しい日々…ただ、あたしにはひとつだけ悩みがあります！ひとつは片思いの長岡君に告白ができないこと。もうひとつは…）

（つい最近、居候することになったバカ魔法使いのせいで未だに眠れぬ夜をすごしていること…）

そうすると藍の顔面にリルの足蹴りが飛んできた。

「うぶっ！」

藍は鼻をおさえるとなみだ目でリルをにらみつけた。
そしてリルの足をそっぽにやるとまた眠ろうとした。
ところが…

今度はリルが「ガブツ」と藍の頭に噛み付いてきた。
そしてリルは藍の頭にキスをした。

「ひいいいっつっ！」

寢言でリルは

「うゝん…あたしの黒毛和牛ちゃあゝん」

といていた…

とうとう藍は耐え切れなくなり、リルを殴りつけた。

「いい加減にしろ！このバカ魔法使いがあゝ！」

明け方なので近所の人たちはびっくりして飛び上がった。

「あら、藍、おはよう。」

一階ではお母さんが朝食を作っていた。

「あら、藍ってば、全然眠っていない顔してどうしたの？」

目の下にできている隈をみつめ藍のお母さんは一言言った。

藍にボコボコにされたにもかかわらずリルは朝食にかぶりつく。

（やっぱりこいつバカだ…）

藍は心の中でそう思っていた…

「いつてきまゝす。」

藍はお母さんに言うつと家を出て行った…

藍が出て行った後…

リルは朝食の後片付けをしているお母さんに質問をした。

「ねえ。藍ってば、どこに行くの？」

お母さんは

「学校よ。」

と答えた。

「藍が通っているのは桜鳳高校よ。」
と、いうとすぐに電話が鳴った。

「ハイ、早川ですが…あら〜！お久しぶり〜！」

お母さんは電話に夢中だった。

「学校…？」

リルはほつきを見つめると手にとって決意をした。

「よしっ！あたしも行ってみよう。」

その頃…

「大変です！魔法長様！長老様〜！」

一人の魔法使いはドタバタと走っていた…

「一体どうしたんだ？」

魔法長が魔法使いを落ち着かせて事情を聞いた。

「それが…リルの…リルの姿がどこにもないんです！」

「何じゃと！？」

それを聞いて奥のほうで入浴していた長老は浴室のカーテンを開けて飛び出して来た…

それを見て魔法使いは「キャッ！」といって顔をおおい、魔法長は「長老、落ち着いて…とにかく大事なところにタオルをまいて…」といった。

「おお、そうじゃった。」

長老がタオルを巻くと、魔法使いは顔をおおうのをやめてあらためて言った…

「さっき…ここについたとき…メンバーを確認していたら、リルの姿がなくなっ…」

冷静な対処で魔法長は長老に言った。

「多分、あの雲に入ったときに…」

長老は頭を抱えた。

「多分な…リル…お前って奴は…」

そして長老は立ち上がり、魔法長に言った。

「よしつ。魔法界から各自に搜索隊を出せ。」

「ハッ！」

するとまたあまりのいきおいにタオルがほどけてしまった。

「キヤアッ！」

「あ、いけね。」

魔法使いは顔をおおい、長老はすっぱんぽんになっていた。

一方…

電車の中では藍が仮眠をとっていた…

「ゴンッ！」

頭をぶつけてやっと目をさますと、ハッと気がついた。

麻里子は心配そうに言った。

「大丈夫？ なんだか眠そうな顔をしているけど…昨日ちゃんと眠れたの？」

藍は

「それがね…昨日うちにきた魔法使いが…」

ハッと気がつくというのをやめて

「ううん。ちゃんと眠れたよ。」

と言った。

（いけない、いけない…ここで「昨日うちに来た魔法使いのせいで眠れなくなっちゃったの。」だなんて言ったら、おかしく思われちゃう！）

そういつて口をおおった。

学校へ行き授業を受けていた…

と…

「M S・藍。」

先生の説明をうけながらチラッと廊下の窓に顔を向けた。

すると、そこにリルの逆さになった顔がブラインとぶらさがっていた。

それを見た藍の顔はますます真っ青になっていった…

「？M S 藍？」

「オーマイガット！」

「？」

皆は藍の発言に首をかしげたが、藍本人にそんなことを気にしている暇はなかった。

「ちよつとエックスキューズミー！」

そういつて藍は教室を出て行くとリルをトイレへ連れ去った…

教室の中では皆

（どうして最後の最後まで英語なんだ？）

と疑問を抱いていた…

「まったく、こんなところまで来て何してんのよ！」

藍が言うとリルは

「あたしも藍の入っている学校に入る！」

と言った。

藍はそういわれてもしもリルが入学したことを想像してみた…

自己紹介でリルが魔法使いと名乗る。

皆「リルの頭がおかしい。」と口々に言う。

更にリルが休み時間にほうきで空を飛び…

先生が

「この娘の保護者を呼ぼう。」

といって来たのが藍のお母さんとお父さん。

長岡がそれを見て藍を軽蔑する…

それを創造した藍は血の気がサーッとひいてきて、

「絶〜つつつ对ダメダメダメダメ〜~~~~~~~~~~~~~~~~」

」！」

と率直に言った。

「なんで？」

「魔法使いが人間界の学校に入学するなんて無理に決まっているじゃない！」

それを見て、しばらくリルは考え込むと

「考えすぎだよ。」

とニツコリと笑って言った。

「あんたは想像力なさすぎっつ！」

藍は頭を抱えて

「ああ…長岡君に嫌われるなんてあたし、耐えられない…」

とブツブツと言っていた…

フツと藍が気付くと、そこにリルの姿はなかった。

「あれ？もしかして…」

トイレの小窓を見るとそこにはほうきで空を飛んでいるリルの姿があった。

「…っあんのバカッツ！」

校長室では…

「ズズーッ！いいお茶ですな。校長。」

「ズズーッ！そうですな。教頭。」

と教頭と校長がお茶を飲んでなごんでいた。

「それにしてもいい天気ですな。教頭。」

「そうですな。校長。」

校長は窓の外を見上げた。

するとそこにはリルがほうきで飛んでいる姿があった…
それを見て校長は…

「…教頭。どうやら私は熱があるらしい。」
と頭を抱えた。

「ハッ！すぐに風邪薬を手配します。」

そういつて教頭は校長室からでていった…
と、リルが窓からおりてきた。

校長は老眼鏡をふいてリルを見上げると…

「？君は？」

と言った。

そこへ藍が駆けつけてきて、

「リルっ！」

と呼んだ。

リルはポケットから糸につるした十円を取り出した。

「何してんの？」

藍が聞くと…

「催眠術。」

と一言。

「ええ！？魔法使わないの？」

「イヤ、初心者だし。」

リルは頭をぼりぼりとかいた。

すると、校長はどんどん催眠術にかかった。

「ええ！？かかっちゃうの！？」

藍が突っ込むと…

校長は勝手に校長室をでていった…

藍とリルが追いかけると…

藍のクラスに校長がでてきた…

そして…

「皆さん、今日から転入する早川リルだ。」

英語の先生は

「校長、今は英語の時間でして、生徒の紹介は…」

といおうとした。すると…

「君は私に口答えするのかね？減給じゃ。」

と言い放った。

「ええ？」

英語の先生は何がなんだかわからなくなって、とりあえず校長の言うとおりにした。

すると校長はハッと気がつく

「あれ？わし…？」

と辺りを見渡すと校長室へ帰っていった…

そんなこんなで藍の学校に入学することになったリルはにかつと笑った。

(…っっ！？)

リルは大声で

「みなさん、これからよろしくおねがいします！」
と言った。

藍は心の中で

(あ~~~~！これからどうなるの~~~~！？)
と嘆き叫んでいた…

第三話に続く

第二話初心者魔法使いの学校入学（！？）（前編）（後書き）

いかがでしたか？

一応前編と後編で分けているんですけどね…

後編では早速入学したリルが…

それは第三話を見てから…

それでは！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3292b/>

超初心者魔法使い修行中

2010年10月11日03時14分発行